

石原和著『「ぞめき」の時空間と如来教 近世後期の救済論的転回』

松本 智也

一 本書は民衆宗教研究で活躍する若手研究者である著者の博士学位論文をもとにしている。序章と本論二部六章と結章の構成である。

序章ではまず民衆宗教研究・如来教研究の動向を整理して課題を剔出し、本書の立場、分析視角、方法について述べる。民衆宗教とは近世後期から近代に民衆の間におこった一連の創唱的宗教のことである。

民衆宗教は一九六〇年代の分野開拓以来、マルクス主義的・近代主義的なバイアスがかかったままなから、近代宗教の萌芽や、国家に抵抗しうる可能性が読みだされてきた。しかし九〇年代に、研究者のナラティブが介在していることが問題視され、民衆宗教研究の依拠していた理論が揺らいでいくなか研究が低調化していく。二〇一〇年代になると、こうした状況を克服する研究が登場しつつあるが、近世期の展開については研究が遅れている現状にある。また民衆宗教研究は教団史的な枠組を維持してきたため日本宗教史の新成果から孤立しており、対象・

方法・理論の更新が求められる。以上の研究状況を踏まえ本書は近世民衆宗教としての如来教に着目し、近代民衆宗教の前史として捉えられがちな近世民衆宗教を当時の宗教環境の総体の中に位置づけ、もって従来の民衆宗教像やその歴史的な位置づけの相対化を試みんとする。分析にあたり、数多の救済論と信仰実践・宗教知が跋扈し、それを享受する人々が騒がしくも敬虔に自らの救済に向き合う〈場〉を「ぞめき」の時空間として設定し、そこにおいて近世社会における救済論的転回を捉え、如来教を位置づける。そのさい救済の受け手に注目し、救済を求めて受け取る信者と、それに応答し救済を提示する宗教との相互関係に留意する。以上を踏まえ、他の研究領域から孤立した状況にあった民衆宗教研究を周辺諸分野の研究成果に接続していく。

第一部「一八〇〇年前後の救済課題と如来教」は一八〇〇年前後の救済パラダイムのなかに如来教の展開と言説を位置づける。第一章「一八〇〇年前後における救済の動揺」では、救済のパラダイムが転換した

〔場〕を提示する方法として三業惑乱に着目し、如来教の登場を一八〇〇年前後の宗教環境のなかに位置づける。当時真宗では、正統から外れた異端的信仰の疑いのある信仰が異安心として摘発される状況にあった。三業惑乱は、近世中期に広まった能動的・実践的な救済のあり方を反映した三業帰命説が否定され、より受動的な信仰のあり方が正統とされた教学論争であった。これは信者にとっては日々実践してきた救済を求めるためのつとめの方法が突然否定され、動揺し、問われるべきものとなってしまふ信仰上の衝撃であった。こうした状況下において如来教の喜之は自力こそが現世において困難を抱えている原因だと位置づけ、如来に全てを任せる他力の信仰という救済のあり方を提示した。説教のなかでは身体実践的な側面が背景に退けられ、心の状態や他者との関係の中に救済の方法の所在を求めていった。如来教は、つとめの方法への問いという課題を共有し、それへの応答という社会的役割の一端を担いつつ、この役割を果たすことで信者を獲得し、勢力を伸ばしていった宗教であると著者は指摘する。

第二章「名古屋城下の真宗異安心と如来教」では、真宗にみられた救済課題との同時代性に注目し、都市名古屋に如来教の展開を位置づける。まず名古屋城下の真宗の動向を探るにあたり本御坊御堂再建工事に着目する。工事には城下の一割近くの人が関与しており、原動力となった各村の講は信仰生活の基盤、結集の原点であった。このとき真宗の講に欠如していた機能を秋葉信仰などの他宗教によって補っていたことが窺える。続いて「新敷宗意」事件と尾州五人男の異安心騒動を取り上げ、三業惑乱の渦中の人々の反応としてのつとめの方法の動揺と獲得による新しい救済は、一八〇〇年前後という時代を経験した「渴仰の貴賤」が直面した問題に込めるため、「行や作善を實踐しても救われぬいのは心が伴っていないから」と解釈し心が見出されることよって創出されたものである。この論理を「物語」の創造によって「渴仰の貴賤」に提示していった点にこそ如来教の特徴があったと著者は主張する。

第二章「一八〇〇年前後名古屋の宗教環境と如来教世界の形成」は如来教の世界観の特徴について、同時代の諸宗教の動向との関連から探る。第一章「如来教世界の形成過程と秋葉信仰」では、如来教が多様な仏神を内包した宗教世界を構築していたことに注目する。なかでも如来教説教に頻繁に登場する秋葉信仰に焦点を当てた。まず尾張地域の地誌を通して秋葉信仰の展開について示す。一八〇〇年前後の名古屋では急激に秋葉信仰が広まり、信者を増やし、真宗など既存の宗派を補完する役割を果たしていた。それを踏まえ、下郷家に残る文書から秋葉講の活動実態をみていき、秋葉信仰の具体的な信仰活動が宗派横断的に行われており、人々の信仰に重層性があったことを示す。秋葉信仰と同じ時空間にあった如来教は、元来火防の利益があった秋葉を金毘羅の低位にある神として位置づけて明確な上下関係を構築し、秋葉特有の利益であった火防を一切の救済を担う自らの救済の下に引き込み、実践的な側面が強かった秋葉信仰の救済を心の定置による救済へと転換させた。このように、如来教は他宗教と対峙するにあたり、敵対する利益として排除するのではなく、自らの救済の根幹となる世界をいったん解体し、そこに組み込む形で再編した点に特徴があると著者は指

ラレルな動向が名古屋にあったことを示す。三業惑乱後の混乱の中、他力本願を旨とする真宗において、自力的救済説とみなされた意業募りや、身口意の一致によって救済を願う三業募りを打破し、正しい信心・安心の提示が求められる中で、五人男の活動・説教が登場・展開した。如来教もそれと同様に、「いかにすれば救われるのか」と惑う人びとに対峙しながら、つとめの方法への問いに応答していくなかで、救済のための重要な命題として、ころろが定置すべきものとして見出された。以上を踏まえ、「心」の変革という問題は近代像を投影するのではなく、当時の宗教動向や社会総体の文脈における救済論の歴史的展開の必然性から捉えなおされるべき問題であると著者は主張する。

第三章「渴仰の貴賤」と如来教」では、「渴仰の貴賤」と総称される人々が何を求めていたのかについて、つとめの方法への問いという課題、およびそれへの心の定置という方法による応答を通して検討する。まずこの時代における信仰活動として、開帳や宗教施設造営工事への関与を取り上げ、寄進や奉仕によって仏神に渴仰した人々の姿を示す。「渴仰の貴賤」の行動の思想的基盤には善書に基づく作善思想があり、それによって人々はその実践の機会を願い、寺社も結果としてその要求にこたえていった。開帳、工事はそうした自力救済の実践の場として機能した。しかしこのように当時一般化していた作善では善悪の行為によつて救済が決まるものであった。それにたいし喜之は金銭の喜捨を伴う作善実践を、金銭の有無に関わらない心と対置させながら、救済を金銭の問題から心の問題へ転化し、作善による自己救済に同調したくてもできなかった人々にこたえた。このように如来教が提示した善心獲

摘する。

第二章「如来教説教の想像力としての近世親鸞伝」は、民衆宗教の説教の中で展開する「物語」がどのように構成されているのか、それが同時代の宗教の動向とどのように関わっているのかについて、如来教における「高祖親鸞聖人御枕石」から考える。如来教説教において語られた縁起は同時期までに広く流布していた枕石寺の公式の宝物の縁起とは全く違う内容となっており、絵解きというメディアを通じた宗教知によって構成されたものだとして著者は分析する。如来教の縁起語りは喜之がその時点ですでに身につけていた宗教知を再構成することで成立していた。当時の人々にとって常識的な知識に基づいて人々が納得しうる範疇の中で自らの世界観を語ることで新たな知を形成させ、それを再語りすることで独自化していく。民衆宗教・如来教は、宗教知の環の中に生まれ、思想・教義・世界観を形成し、その再語りを繰り返していく中で徐々に独自化を進め、もつて多くの信仰者を獲得していったと著者は指摘する。

第三章「文政地震と如来教」は、現実の社会の動向のなかに近世民衆宗教・如来教を位置づけてその営為を評価する。同時に如来教という一宗教を事例として、近世の人々が災害という非日常の事態にどう向き合ったかという、より普遍的な問題を明らかにする。地震は現世的・物理的な恐怖にとどまらず、未成仏の靈魂、仏神の世界とも密接にかかわる恐怖としてとらえられていた。こうした人々の恐怖を鎮める役割を寺社が果たした。非日常に対応した地震説教において表出したこととして、近世に共有されていた世界観を如来教もまた共有していた。喜之

は説教の中で地震と現世を生きる人々の心の問題を結びつけて語り、信者が心を定められていないために地震は起こされたのであり、今後より大きな地震が起こるだろうという予言を行った。結局次の地震は起こらなかったが、これに続く説教では、この世に住む人々が心を善くしたので仏神たちが地震をおこさなかったと説き、予言が外れたことに意味をもたせた。このように、現実の動向に合わせて瞬時に対応し、信仰者たちにとって常識的な世界観を再構成しつつ説得的な世界観を創り上げる即興力をもって、非日常とそこに生きる人々に対峙し、日常で培い語ってきた世界観を強化した。このような説教の変容が絶え間ない信仰の正統性の更新を可能にするものとして機能したと著者は指摘する。

結章では本書を要約し民衆宗教・如来教を近世後期の宗教史上に位置づける。如来教信者を含む一八〇〇年前後の名古屋は利潤追求傾向・能力主義の強化、実力・経済力の重視といった動向に連動し、従来の共同体や人間関係に変化が起こっていた。そうしたなか何をすれば往生できるのかというつとめの方法が模索されるようになった。まず具体的行為によって自らの救済へ向かう能動的・実践的信仰を各人で突き詰めていくことが重視されるようになり、救済の個人化が進んでいった。一方こうした人間関係が希薄化し個人化していく現実には抗い、従来の秩序を回復していかうとする文脈において、心の定置による救済が見いだされていった。かかる動向を一八〇〇年前後の救済パラダイムに位置づけるため黒住教と不二道を事例に挙げ、三業惑乱から如来教への流れを近世後期の動向として一般化する。如来教の特質は同時

識が前面に出る傾向にある。本書の問題意識・方法論は同時期を研究の対象とする研究者にとっても示唆に富むものである。第三に、善書への着目は前近代の東アジアにおける「宗教」のありようの共時性を検討するにあたり興味深い問題提起である。今後、清朝や朝鮮王朝、琉球王国などにおいて救済の問題と善書がどのように結びついているのかを比較検討するにあたり有効な視角ではないだろうか。第四に、本書の端々に現代的諸問題に対する鋭い問題意識が窺える。本書では金銭への喜捨を伴う作善実践の限界に対し、心の定置によってそれを乗り越えようとするものとして如来教の救済を位置づけた。これは、グローバル資本主義のもと深刻な格差、人間関係の分断が生じ、生きづらさを強いられている二一世紀の多くの人々にとっても示唆深いように思われる。なおここでは十分に紹介できないが、本書が端々で紹介する史料からは「ぞめき」の時空間の豊饒な世界のありようが垣間見え、この点に関しても読み応えがある。

一方、「心」の捉え方の近世初期と近世後期との相違については少々理解が難しく感じた。状況への対応という側面からみると、たしかに一八〇〇年前後の特質は明瞭である。共同体の破壊、人間関係の希薄化という状況においては、一見すると一八〇〇年前後を生きる人々と戦国期を経た近世前期の人々とは共通する課題に直面していたように思われるが、一八〇〇年前後という時期は消費社会を経、また「正統―異端」という対立軸が生まれてその枠組み自体から疎外される者が現れる事態も生じた点に特色がある。そうした状況において対応の仕方、「心の定置」を示す方法に変化が現れた。この近世後期の「心の定置」という

代的に展開した宗教との対峙、同時代の宗教知の再構成、目の前の出来事や日常の諸問題に応じた宗教世界の創造を通して創られたところにあると著者は結論付ける。

二

本書の意義は次の諸点にあると思われる。第一に、積極的に周辺分野との接続を試みている点である。本書は「孤高の宗教」と位置づけられてきた民衆宗教・如来教を積極的に隣接諸分野に目配せして位置づけ直した。その結果、如来教は他宗教との重層性のなかで存立していたこと、同時期の真宗が抱えていたものと共通する課題に直面していたことが明らかになった。また宗教の受け手の人々が教団を越えて複数の信仰を持っていたことも明らかにした。これにより民衆宗教像が刷新され、ひいては前近代における「宗教」の見直しをも喚起しよう。従来の宗教史研究を取り巻く教団史的枠組みの強固さを思えば本書の意義の大きさは計り知れない。また周辺分野との接続を意識して当該期の名古屋の社会状況について綿密な調査をもとに再構成した点も意義深い。書物史、社会史、災害史、都市史、地域史など諸分野への接続を試みており、それぞれの分野の研究にも刺激を与えるものとなる。第二に、一八〇〇年前後という時期について近代化論の文脈を相対化し、当時の社会状況から再構成した点である。同時期を扱う際、他分野でも近代化論が暗黙の前提となっている場合が多い。たとえば評者の専門とする一八世紀後期から一九世紀前期の日期関係についても近代化論の文脈が暗黙裡に前提され、当該期の歴史の実相よりも研究者の問題意

のが「自力」（身体性）にたいするアンチテーゼとして現れてきたという点に特色があるという本書の主張は明快で説得力がある。ところで、「心」を重視するという論理は近世前期における唯心論的な救済の論理とどのように相違するのだろうか。戦国期の天道思想は超越的な仏神に一体化したものであったが、近世期に入ると天道が因果応報による呪縛として理解されるようになり、それが自覚化されて心の主体性が見出される。やがて「善行をすれば善いことがやってくる」という理解に至り帰命中心の信仰へと転回するが、それに反発して再び心を重視する方向に揺り戻しがくる。本書はこのように救済の論理が心の主体性と身体性との間で揺れ動いていたと論じる。ではその「心」についての捉え方の質的变化がどこにあるのかがいささか気になった。

また、如来教の位置づけについていくつか気になったことがある。本書は同時代の「宗教」動向のなかに如来教を位置づけた。近年進捗著しい宗教研究の動向への接続を試みるという趣旨に鑑みると正当な手続きであると思われる。しかし同時代の精神活動についてももう少し広く捉えることはできないだろうか。「渴仰の貴賤」の直面していた問題は本居宣長や会沢安などの捉えた「危機意識」と通底する側面があるようにも思われる。カネの力が社会全体を覆い、社会が平等化・競争化にさらされていることにたいする危機意識から、それに抗して「筋目」を守ろうとする正当化の根拠として「国体」が登場した（二）。すなわち直面していた問題は共通するがその対応の仕方に相違があった。「天皇」「国体」なるものとは別の回路があったところにこそ「近世」民衆宗教の特質があると考えられる（二）。また、教団化に至らなかった多数の宗教

活動の葛藤があり、それらは未完の創唱宗教Ⅱ「切支丹」として摘発された(三)。教団史的研究の相対化を目指すうえで、教団化しなかった未発の諸活動を位置づけていくことが今後求められてくるように思われた。もともと、本書における対象の偏りは史料制約に起因する側面もあるもので、現段階ではやむをえないのであろう。今後これらの諸々の精神活動とどのように交叉していくのかが興味深い。それから近代との関連についてである。「如来教」は、石橋智信による研究を通じてそのように「名付けられ」、信者は石橋の研究を通じて自らの信仰を自覚した(一三―一四頁)。してみると石橋の登場が「如来教」にとって大きな画期となるように思われる(四)。ところで本書八五頁の表を見ると、近世期の名古屋には曹洞宗も相当多かったことが理解できる。如来教は近代になり曹洞宗の傘下に入って宗教活動を行うようになる(七頁)。近代を展望していくと、真宗のみならず曹洞宗との関連についても気になってくるところである。

評者は宗教史を専門としておらず誤読も多々あるかもしれぬがご海容いただければ幸いである。評者の抱いた疑問点は決して本書の価値を減ずるものではない。むしろ多くの論点を喚起させる点にこそ本書の意義があろう。本書が積極的に周辺領域との接続を試みているように、広く諸分野の研究者にも本書の一読を勧めたい。

〈注〉

(一) 前田勉「水戸学の「国体」論」『江戸後期の思想空間』ペリカン社、二〇

〇九年)三五六頁。

(二) 如来教は「天照皇大神」は人間の製作を「魔道」に委ねてしまった存在だとしている側面もあり、伊勢信仰はそれほど肯定的に扱われていない。神田秀雄先生のご教示による。

(三) 大橋幸泰『潜伏キリシタン——江戸時代の禁教政策と民衆』(講談社、二〇一四年)一三六頁、井上智勝『民衆宗教の展開』(『岩波講座日本歴史第一四巻 近世五』岩波書店、二〇一五年)。

(四) この点については次の論文に詳しい。石原和「一九二〇年代後半における「如来教」の「創出」」(『東アジア・遭遇する知と日本——トランスナショナルな思想史の試み』文理閣、二〇一九年)。

【付記】二〇二〇年一月三〇日にオンライン上で本書の書評会を行った。当日、著者および神田秀雄先生から応答をいただき、本書の理解をより深めることができました。なお著者は本会会員の一人であり、本書の第一部第二章、第二部第三章はそれぞれ本会報二九号(二〇二二年)、三三三号(二〇一七年)が初出である。本会会員の一人として本書の出版をお祝い申し上げるとともに、今後本書が多くの人びとに読まれることを願う次第である。

(法蔵館、二〇二〇年七月、三七〇頁、四五〇〇円+税)

(立命館大学初任研究員)